

Rwanda

[ルワンダ]

写真・文＝今村健志朗(写真家)

変化と伝統の中で



パイナップルを栽培する女性。首から下げているケースには携帯電話が入っていた



ルワンダ復興の象徴とも言われるキガリ・シティ・タワー

ルは、真下から見上げると青空が反射し、なんとも美しい。
 タワー周辺には、貴金属や高級ブランド品を扱う店が並ぶ。携帯ショップをのぞいてみると、ガラスのショーケースの中には、NOKIAやSAMUNGの携帯電話、スマートフォンで埋め尽くされている。店員によれば「日本製は品質はいいけど、値段も高いから手が出ない」。自動車では、日本ブランドのTOYOTA

やISUZUが圧倒的な存在感だが、中古車が多く、排気ガスによる大気汚染が心配だ。
 首都を出てしばらくすると、黄色いポリタンクを載せた自転車とすれ違った。蛇口をひねれば水が出てくるのは、首都のごく限られた地域だけ。わき水が一般的なルワンダでは、水源は丘のふもとにある。丘の上に住む人々は、水くみのために毎日坂を上り下りしなければならぬ。

店頭にはスマートフォンや携帯電話がぎっしり並べられている



キガリ市内の丘陵地に所狭しと建ち並ぶ民家

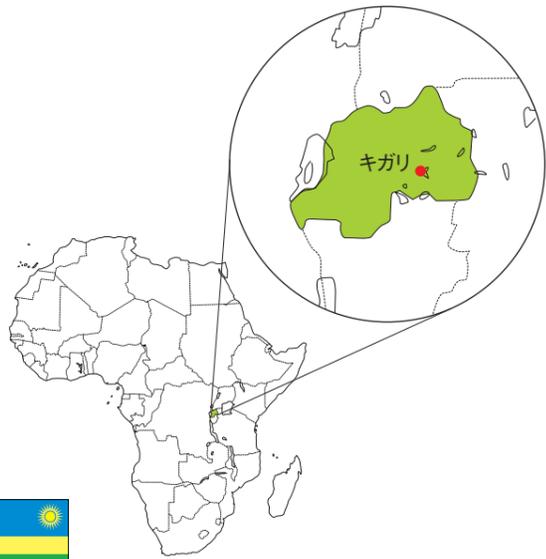


20リットルの水が入ったタンクを自転車に載せて長い坂を上る



遊水池でくんだ水を運ぶ女性や子どもたち。地方部では安全な水を手に入れることも容易ではない

「千の丘の国」と呼ばれるルワンダ。首都キガリ市内でもひととき高い丘には、キガリ・シティ・タワーがそびえ立つ。民族対立や虐殺を逃れ世界中に散らばった人々が、祖国復興のシンボルとして建設したというだけのことはある。19階建てで全面ガラス張り。市内唯一の超高層ビ



首都：キガリ
 面積：約2.63万km²
 人口：約1,090万人(2011年)
 言語：キニアルワンダ語、英語、フランス語
 宗教：キリスト教、イスラム教など
 1人当たり国民総所得(GNI)：570ドル(2011年)
 経路：日本からの直行便はなく、ナイロビやブリュッセルなどで乗り継ぐのが一般的。
 通貨：ルワンダ・フラン(RWF) 1RWF=約0.138円(2013年1月現在)
 気候：3~5月、10~11月が雨期、12~2月、6~8月が乾期。東部のサバンナ地域では年間を通して温暖で、平均気温は25~27度。



サッカーのオンラインゲームに熱中する若者。若い世代のICTへの関心は高い



子どもたちの瞳にこの国の未来はどう映っているのだろうか

ルワンダ料理 牛肉のトマト煮込み 「イソーシ・インニヤマ」



ルワンダの朝の始まりは、パンと砂糖いっぱいミルクティー。食パンやコッペパンなどをミルクティーに浸して食べるのがルワンダ流だ。

昼食と夕食は、主食とおかずを一つの皿に盛りつけて食べる「メランジェ」スタイルが一般的。主食は、ジャガイモやサツマイモ、甘くない料理用バナナ、水に塩を加えて炊いたごはん、キャッサバ粉やトモロコシ粉を水で溶いて練った「ウガリ」などさ

まぎま。おかずはタマネギやニンジン、ホウレンソウなどの野菜を煮込んだものも多く、味付けにはトマトを使うのがポイントだ。この定番のトマト煮込みをベースに、ピーナツの粉や干し魚を加えてアレンジしてもおいしい。

客が来たときや誕生日、クリスマスなど特別な日に欠かせないのは、肉のトマト煮込み「イソーシ・インニヤマ」だ。現地語でイソーシがソース、インニヤマが肉という意味。ルワンダでは、お祝いごとには牛肉がよく使われる。たっぷりのトマトで煮込み、ローズマリーやニンニク、セロリが隠し味。酸味が絶妙に効いたまろやかな味わいで、どの主食にもよく合う人気料理だ。



お祝いがある日には、大人数分を大きな鍋で作る

【材料(4人前)】

牛肉400g / タマネギ・ニンジン・ピーマン各2分の1個 / トマト4個 / トマトペースト30g / A:ローズマリー適量・ニンニク1片・セロリ(みじん切り)10g / コンソメ1個 / 塩少々

【作り方】

1. 牛肉を浸るくらいの水で軟らかくなるまで煮込み、取り出して煮汁を取っておく。
2. 1の牛肉を、油をひいた別の鍋に入れて表面に焼き色をつける。
3. 2にタマネギ(薄切り)、ニンジン(イチョウ切り)、ピーマン(千切り)、Aを加え、野菜が軟らかくなるまで炒める。
4. 3にトマト(乱切り)を入れて10分炒め、トマトペーストを加えてさらに10分炒める。
5. 4に1の煮汁を入れ、コンソメ、塩で味を整えて10分煮込んだら出来上がり。

取材協力：木下和恵(青年海外協力隊)



移動販売に来たオーガニック・ソリューションズのスタッフがメガホンで住民を呼び集める



容器に入った消臭剤からはほのかに甘い香りが

東部のブゲセラ郡には、古き良き日本のような美しい田園風景が広がる。
 農民は素朴でいたって真面目。整然と並ぶ水稲の草取りは、人の手で、地道に行われている。物事にコツコツと取り組むルワンダ人の性格は日本人に通ずるものがある。
 しかし、ルワンダのコメ作りの歴史はまだ浅く、品質や生産性は低い。さらに、収穫を担保にした信用取引を政府が中止するなど、農家を取り巻く環境は厳しい。
 そんな中、近年勢いを見せるのが、情報通信技術(ICT)だ。主にパソコンやスマートフォンを使って、電子送金やソーシャルメディア、ソフト開発をするというもの。起業家たちはもちろん、10代の若者たちの関心も高い。まさに、旬の職業なのだ。

日本発のBOPビジネスも、じわじわとキガリに定着し始めている。株式会社オーガニック・ソリューションズだ。
 約20年前、わずか3カ月で100万人規模の虐殺が起こり、小さな国土が真っ赤な血にまみれたルワンダ。そんな悲しい歴史を背負いながらも、今や、アフリカのシンガポールと呼ばれるほどのスマートな国に変ぼうしつつある。
 ヨンズ・ジャパンは、ルワンダに現地法人を設立。微生物を利用したトイレの消臭剤を製造販売している。独自に開発した液体をトイレの便槽に入れるだけで、臭いが消え、たまった汚物の減量にもなるという。これから確実に需要が期待できるスマートな衛生ビジネスだ。



あぜ道を仲良く並んで歩く子どもたち



除草機を押すと羽が回転し、土に空気を送り込める仕組みになっている



通信インフラを生かした産業の創出

アフリカの中でも、インターネットや携帯電話といった通信環境の整備が進んでいるルワンダ。光ケーブルをはじめ、通信インフラの拡張に力を入れている。それを生かした情報通信技術（ICT）ビジネスは、今後の国の発展を支える産業として期待が高い。そこでJICAは首都キガリにICTインキュベーションセンター「kLab」を設置。商工会議所がワークショップを開催するなど、学生や若いICT企業家が自由に情報交換しながら独創的なICTビジネスを創出する“場”として活用されている。



JICAの活動

in ルワンダ

写真=今村健志朗

1994年の大量虐殺から復興を遂げ、近年は平均8.5%の高い経済成長率を維持するルワンダ。JICAは“アフリカの奇跡”とも称されるこの国で、安定した成長の基盤づくりに取り組む。

JICAの支援

ここがポイント!

- 情報通信技術
- 電力インフラ整備
- 産業人材育成

2 電力インフラ整備



電力をより多くの人々へ

ルワンダ全土の電力普及率はわずか14%。現地の人々の生活向上、産業発展のためには、より多くの地域に電力を届けることが必要だ。JICAは首都圏を中心に、ハード面では配電網の拡張や改修を支援。ソフト面でも日本人専門家が電力設備の効率的な維持管理方法を電力公社の職員に伝えている。今後はより安定した電力供給を目指し、ルワンダの豊富な地熱資源を生かした発電開発計画づくりへの支援も予定している。



3 産業人材育成



産業を支える即戦力の人づくり

国の産業を持続的に発展させるには、専門技術を持った人材の育成が欠かせない。そこでJICAは、情報技術、電子・通信、代替エネルギーの学科を持つ「トゥンバ高等技術専門学校」を2007年の立ち上げから支援。ルワンダ初のインターンシップ制度の導入などを通じ、実践的な技術を身に付けた生徒を育成する場として注目を浴びている。さらにカリキュラム作成や学校運営のノウハウを伝えることで、ルワンダの人材育成のモデル校となることを目指す。

